



聖書朗読の時間

西脇 良

カトリック図書との出会いに関連して、聖書にまつわる少年時代の思い出をひとつ、書かせていただければと思う。当時神言神学院に附設されていた小神学校（司祭養成機関）で生活を始めた、中学一年の頃の思い出である。大人が使用する通常の聖書に初めて出会った頃のことである。

私が入学した当時の小神学校では、翌朝のミサで朗読される聖書の箇所を、夕食後の自習時間の合間に朗読する習慣があった。まず、夜の自習時間の前半終了後に「おやつ時間」がある。先輩らと階下の食堂へ行き、そこでクッキーや飲み物などをわいわい言いながら食した後、再び自習室に戻って勉強をするのであるが、自習時間の後半が再開される折りに、心を落ち着けるためであろう、祈りと聖書朗読がおこなわれていたのである。聖書朗読は各自習室ごと、学生全員が当番でおこなうことになっていた。当番になると、自分で朗読箇所を探し当て、部屋の中央に立ち、皆の方を向いて朗読する習わしであった。私にも当番がまわってきたが、これが一苦労であった。

自習室に置かれた聖書（バルバロ訳であったと記憶している）は、体が小さかった私にはとても大きく、重たい書物であった。聖書をどっころしょっと開き、先輩に朗読箇所の調べ方を教えてもらい、やっと探し当てた箇所を、難しい漢字につかえひっかかりしながら、指でなぞりながら読む。もちろん、内容はさっぱり、ちんぷんかんぷんである。そんなたどたどしい朗読を聞かされている先輩たちにとっても、よい我慢の修行になったことであろう。自分で何を読んでいるのかさっぱり分からないまま、ようやくのこと、「朗読」めいたものを終えると、しかし、役割を無事に終えたことへの安心感ばかりでなく、少しばかり得意な気持ちにもなっていたことが、今思い出しても恥ずかしい。

とにかく、そんな朗読の儀式であったが、自習時間そのものよりもよほど厳粛であり、普段は楽しく冗談を言う先輩も、この時ばかりは私たちがふざけているとコワイ顔で怒っていたものだ。学習時間のまっただ中に割り込んでいくかたちで設定された聖書朗読の時間は、せっかく調子よく宿題を進めているところを中断されるのであるから、ちょっと迷惑なところもあったが、生活の中に聖書が溶け込んでいくことの意味を教えられたように思う。

ものを習うときには、「かたち」から入る方法と、意味を理解しながらすすんでいく方法と、二つあると思うが、小神学校での聖書との出会いは、たしかに前者による方法であったろう。内容はさっぱり分からなくても、とにかく一定の所作をもって朗読の儀式をおこなうことが重要であったのだから。内容は理解し難いが大切にされる書物。そして内容の理解よりも「かたち」が優先された、その頃の朗読の時間。それが、司祭になる道程の第一歩であったし、ものを習うということの原点もそこにあったように思う。

(Ryo NISHIWAKI : 総合政策学部助教授)

グレゴリオ聖歌の成り立ちとその歴史

藤塚あつ子

前号の『カトリコス』20号で高田三郎氏と関わりの深い典礼聖歌とその聖歌集について取り上げたが、高田氏は高名な作曲家であると同時に、グレゴリオ聖歌の研究者でもあった。前号と重なる部分はあるが、今号では特にグレゴリオ聖歌を取り上げ、この聖歌とその歴史について概観してみたい。

・グレゴリオ聖歌とは

ローマ・カトリック教会において1000年以上の長きに渡り歌い継がれてきた単旋律の典礼聖歌、それがグレゴリオ聖歌である。ローマ・カトリック典礼とともに発展し今に至るこの聖歌は、典礼的にはミサ用と聖務日課用とに大きく分けられ、前者の聖歌集がグラドゥアーレ (Graduale)、後者の聖歌集がアンティフォナーレ (Antiphonale) と呼ばれる。

中世以来の伝統を持つこの聖歌の特徴としては、大部分がラテン語聖書からとった典礼文を歌詞とする^{注1}こと、さらには無伴奏 (ア・カペラ) で歌われることが挙げられる。聖歌の旋律は教会旋法と呼ばれる8種類の音階を使用する。聖歌はカトリックの典礼とは不可分のものであり、ミサや聖務日課などの全曲目を覆うもの^{注2}として、現在まで広く歌われてきた。ローマ教皇が認めた公式の聖歌であることから、正しくは「ローマ典礼聖歌」と称されるべきであろう。

しかし教皇グレゴリウス1世 (在位 590-604年) により聖歌が編纂されたという伝承により、9世紀頃から「グレゴリオ聖歌」と呼ばれ始め、以来この名が一般的となる。「グレゴリウス教皇は」の言葉で始まる、同教皇の功績を称える文章 (Gregorius praesul) (800年頃成立) が聖歌集の序文に収められたことにより、この伝承が広まった。助祭ヨハネスによるグレゴリウス1世の伝記『聖グレゴリオ伝』(872年) には「グレゴリオはアンティフォナリウム (聖歌集) を編纂し、スコラ・カントールム (聖歌学校) を設立した」という記述が見られ、伝承はこれに基づく通説であるとも言われる。しかしながら、教皇から数百年も下った時代に書かれたグレゴリオ伝は信憑性が低く、伝承の歴史的根拠も薄い。このため聖歌研究者の間では、伝承は今や伝説としか捉えられていないようである。ともあれ前述の聖歌集序文やこのグレゴリオ伝が普及し、「グレゴリオ」の名が冠せられた名称が誕生したが、グレゴリウス1世が聖歌の形成に関わったことは事実にしる、現在伝わっている聖歌が全てこの教皇によって7世紀に作られたとは現在では考えられていない。早くても8~9世紀頃、アルプス以北のガリア、ゲルマン地域で成立したという説が有力である。

注1：古典ラテン語ではなく教会ラテン語 (発音は現在、イタリア式 (ローマ式・教会式とも)・ドイツ式・古典式の3流派に大別される。最も多いのはイタリア式)。また、ヘブライ語やギリシャ語を織り交ぜることもある。例えば「Kyrie キリエ (主よ)」とはギリシャ語の音写である。

注2：厳密にはミサ固有式文聖歌にあたる500~600曲のみをグレゴリオ聖歌とする説もある。この説によると、ミサ通常式文聖歌は固有式文聖歌と比べ、音楽様式上かなり差異があるため本来なら除外すべきとされる。しかし一般的にはこの通常式文聖歌と、固有式文聖歌と密接な関係にある聖務日課用の聖歌も含め、グレゴリオ聖歌と呼んでいる。

・発生から成立まで

聖歌の源をたどるには聖歌集などの資料にあたることが重要となる。最古の聖歌集は9世紀までさかのぼるが、旋律については記録がなく、歌詞のみのものであった。つまり、当時はどのような旋律だったのかという実証的研究が困難なためグレゴリオ聖歌の成立については今なお不明な点が多いのである。聖歌の起源を何に求めるかについては諸説あり、一概には言いがたい。

初期のキリスト教会が歌によって祈るという習慣を取り入れたのはユダヤのシナゴグ音楽からであったが、ユダヤだけでなくギリシャ、ヘレニズム的音楽や地中海地域文化圏の影響も認められる。また、さらに東方的な要素を土台にし、ガリア、ゲルマン的要素も同化させ、13世紀頃までに徐々に形成されていったと考えられる。

初期キリスト教会において、ある程度は組織化された典礼音楽が存在していたが、特に東方では新たな創作詩の聖歌、つまり賛歌（イムヌス）がシリア（エデッサ、アンティオキア）で起こり、エジプト（アレクサンドリア）へと広がってシリア聖歌、コプト聖歌など、それぞれの地域独特の聖歌を発展させていた。このような東方教会聖歌の影響下に、西方教会でも4世紀から7世紀にかけて各地でラテン語による独自の聖歌を成立させていったのである。東方の聖歌歌唱を西方にもたらした1人であるミラノ司教アンブロシウス（397年没）によるアンブロシウス聖歌の他、フランスのガリア聖歌、スペインのモサラベ聖歌など、ヨーロッパ各地に地方の変種とも言える固有の聖歌が存在していた。種々の聖歌はそれぞれの地方の典礼に伴うものであったが、それら地方的典礼をローマ式の典礼に統一しようと企図したのがグレゴリウス1世であり、典礼文の改訂整理や、それまでの聖歌を収集し統一の見地から校訂していく過程で果たした役割は大きかったと言えよう。また、グレゴリウス1世以後も教皇ウィタリアヌス（在位657-672年）などにより聖歌への大幅な手入れが行われていたのは間違いないとされている。

ローマ式典礼聖歌が確立した後はローマ教皇権の拡大に伴い、カロリング朝フランク王国の初代国王ピピン^{注3}やその息子シャルルマーニュ^{注4}は典礼統一政策をとった。ローマの典礼と聖歌を導入し普及させたのである。前述した地方的典礼の諸体系は、統一政策により禁止されたことで徐々に消滅していった。ただし全てが廃止されたわけではなく、例えばガリア典礼の楽曲の一部は導入されたローマ典礼に同化して残った。このようにしてローマ典礼以外の要素が加わっていったと考えられる。

ローマとフランクが手を結んで緊密な交流をする中、カロリング・ルネサンスと呼ばれる文化的興隆期が豊かなフランクの土壌で聖歌を育み、発展させた。ローマ典礼と共にアルプス以北へ導入された、東方聖歌を源流に持つこの聖歌は、こうしてフランクから最終形態を受けて西方世界全域に受け入れられながら変貌していった。フランクで生まれ受け継がれていったこの聖歌と、当時のローマで歌われていた聖歌との間に相違が生じていたことは、メッスのアマラリウス（850年頃没）やザンクト・ガレンの修道士ノートカー・バルブルス（912年没）ら、複数が指摘している^{注5}。

10世紀中頃にもなると、フランク・ゲルマンの要素と融合を果たしたこの聖歌が逆にローマへも影響を及ぼすようになり、ついにローマもこれを採用する。つまり現在グレゴリオ聖歌と呼ばれ親しまれているものは発祥の地ローマではなく、8~9世紀頃フランクとの交流を経たがゆえの、アルプス以北

注3：714-768年。ピピン3世、あるいはピピン短軀王とも呼ばれ、ラヴェンナの地を教皇ステファヌス2世に献じた「ピピンの寄進」でも知られる。この寄進が教皇領の起源となった。

注4：742-814年。カール大帝とも呼ばれる。かつての西ローマ帝国に匹敵するほどの広域を支配するに至った彼は、教皇レオ3世により西ローマ帝国の冠を与えられた。

注5：この時ローマで歌われていたのが「古ローマ聖歌」と呼ばれているものと考えられる。この名称に対し、グレゴリオ聖歌を「新ローマ聖歌」と呼ぶこともある。

地域による強い影響を受けていると言えるのである。9世紀以前は記譜された聖歌集がないことは前述したが、9～10世紀を過ぎるとネウマで記譜された楽譜付き聖歌集が現れ始める。この楽譜付き聖歌集の最古の写本が作成された場所を考えると、アルプス以北に由来するというのはそう無理のある見解ではないであろう^{注6}。

・展開と変遷

10～11世紀になると、グレゴリオ聖歌を定旋律としたポリフォニー（多声音楽）が各地に普及していく。14世紀にはギョーム・ド・マショーが通常唱全体をポリフォニーで書いた傑作「ノートルダムのミサ曲」のような通作ミサ曲が作曲されるまでになった。しかしルネサンス期のポリフォニーは芸術的・技巧的に繁栄を極めたものの、グレゴリオ聖歌本来の旋律が歪曲されてしまったうえに世俗的な音楽も入り込んだため、批判的的となっていた。このような時代背景ゆえに、トリエント公会議（1545-1563）ではグレゴリオ聖歌・単声聖歌以外は締め出すべきという声すら聞かれた。結局は一般的勧告にとどまりポリフォニーは生き残ったが、典礼音楽の浄化をはかる決議がなされたこの時、グレゴリオ聖歌は正式な聖歌として認められたのである。なおトリエント公会議では、グレゴリオ聖歌の原点に戻るため、新形式の聖歌作曲・作詞法である進句（トロース）、続唱（セクエンツィア）の使用禁止が決定され^{注7}、聖歌の整理がはかられた。

しかし皮肉なことに、この流れで起こった改訂聖歌集作成運動により世に出た聖歌集、通称『メディチ版 (Editio Medicea)』（1614年）の出現は印刷業者の利害がからんだ商業主義という側面を持っていた。この聖歌集のさらに大きな特徴は、古典的旋律をルネサンス・バロック風に著しく毀損したという点である。これは聖歌の衰退期を象徴していると言えよう。19世紀に入って古楽譜（ネウマ譜）の解読法の研究が進むのに伴い、各地で聖歌復興の動きも出始めて復興聖歌集が種々出された。中でも『レーゲンスブルク版（プステ版）』（1873年）は「教皇ピオ9世の聖務日課」と題され教会の公認版として出版された。だがこれは『メディチ版』に基づいたものであったため改訂に成功したとは言えず、フランスなどではあまり歓迎されなかった。

一方、フランスのソレムにあるベネディクト会修道院を中心とした、古写本を根拠とする古典的聖歌復興運動が起こっていた。これに注目した教皇ピウス10世（在位1903-1914年）は1903年11月22日、聖チェチリアの祝日に教会音楽についての教皇自発教令^{注8}「トラ・レ・ソッレチトゥーディニ (Tra le sollicitudini)」を發布し、グレゴリオ聖歌を「聖音楽 (= 典礼音楽) の最高の模範 (il supreme modello della musica sacra)」と宣言した。Musica Sacra (聖音楽) の最上の手本としたのである。そして教令發布を機に、かつてソレムの聖歌隊長であったドン・ポティエを委員長として聖歌集編集委員会が組織され、いわゆるグラドゥアーレの「パチカン版」と呼ばれる規範版『ミサ聖歌集 (Graduale Romanum)』（1908年）その他において、古い写本から正統的な旋律を復興する努力が実を結んだ。ただし、角形ネウマで記譜されている4線譜のこの規範版にはリズム記号が付けられていなかった。編集

注6：最も初期（900年頃）の写本はザンクト・ガレン、ラン、アインジーデルン、メッス、シャルトルなどガリア・ゲルマン地域の修道院で作成されたものであり、資料的にはグレゴリオ聖歌はアルプス以北のものと言える。そのネウマ譜は地域によってネウマの形態が異なるが、記された旋律自体にはほとんど違いがなく共通しており、典礼統一が進んだことがうかがえる。

注7：トロースは完全に禁止、セクエンツィアは「ディエス・イレ（怒りの日）」など4つのみ認可（1727年に5曲目の「スターバト・マーテル（悲しみの聖母）」も認可）され、それ以外は禁止された。

注8：教皇が直接発する公文書で、その名の通り教皇が自らの発意で任意に発布する一種の教令。ラテン語の正式名称は"Littera apostolica motu proprio data"であるが、通常略して Motu Proprio（モトゥ・プロプリオ「自発的に」）と呼ぶ。ピウス10世が出したこの教令は「宗教音楽の法典」とすら言われている。

委員会において、旋律に関しては意見の一致を見たものの、リズムの解釈に関しては編集委員長のドン・ポティエに代表される自由リズム論と、ヴァグナーら計量主義の二派に意見が分かれたためである。

また、ソレムの修道院のドン・モクローは聖歌復元のための研究を続けていたが、その研究に基づくリズム記号をバチカン版に付け加えることが1911年、公に認可された。こうして世に出たのがリズム付加バチカン版である。以後、このリズム付加版が広く知られるようになるが、その中でも『リベール・ウズアリス (Liber Usualis)』は特によく用いられるようになった聖歌集であろう。

ドン・モクローが提唱した歌唱法、いわゆる「ソレム唱法」におけるリズムの解釈^{注9}は、ドン・ポティエの自由リズム論を受け継ぎ発展させたものである。だが、この唱法はカトリック教会に公認されているとは言え、歴史的正当性については問題があると考えられている。その問題点を是正しようと試みたのが同じソレムの修道士、ドン・カルディーヌであった。彼は文献比較によって客観的な解釈を行い、聖歌本来の形を再現するという研究を深め、その成果として『グラドゥアーレ・トリプレクス (Graduale Triplex)』(1979年)を出版するに至る。現代におけるグレゴリオ聖歌の隆盛はこのソレムの修道院の研究と実践に負うところが大きいのである。

・第2バチカン公会議以後

振り返ってみると、グレゴリオ聖歌が西洋音楽史に与えた影響は明らかに大きい。例を挙げれば、現在使われている5線譜や音符はグレゴリオ聖歌を記譜したネウマ譜がルーツとなっているし、ヨーロッパのポリフォニーは単声のグレゴリオ聖歌を定旋律とし、そこに第2声部を加えることで始まったなど、枚挙にいとまがない。そのグレゴリオ聖歌を、第2バチカン公会議(1962-1965年)では、典礼憲章第116条で「ローマ式典礼に固有の聖歌」であり、「典礼行為において、他の同等のものの中で首位を占めるべき」としている。しかしこの会議で自国語による典礼が推進されたことにより、既に死語となっていたラテン語の聖歌、つまりグレゴリオ聖歌は次第に使われなくなっていく。

「上手に歌う人は二度祈ることになる (Qui bene cantat, bis orat.)」とラテン語の格言にあるように、聖歌とは単なる音楽ではなく、祈りの言葉である。例えば日本人のように、ラテン語を理解する素地のない文化圏の者が自らの信仰をあらわし神に対する賛美を歌う際、祈りの言葉の意味を真に理解しないままラテン語の発音をただたどるよりも、理解を伴う自国語で行う方が適しているというのは、典礼聖歌に求められる性質を考えれば至極当然のことであろう。そこで、日本でも日本語による聖歌の新作に重点がおかれるようになった。そして、日本人によるオリジナルの聖歌の作詞作曲に活躍したのが、高田三郎氏であった。

しかし昨今グレゴリオ聖歌は癒しの音楽とも言われ、10年ほど前にはシロス修道院聖歌隊の聖歌を録音したCDが世界的にヒットするというブームが起こった。本来歌われるべき典礼の場においてすら聞かれることが少なくなった時期に、またラテン語の聖歌が脚光を浴びるようになったのは大変興味深いことである。聖歌に縁のなかった者の心をも掴んだというのは、グレゴリオ聖歌が宗教音楽の枠を超え、聴く者の心に訴えかける「何か」を持っている確かな証拠と言えよう。

注9：古楽譜のネウマ記譜法(『カトリコス』20号、注5参照)は音符が示す音程はある程度わかるがその音の長短(リズム)は不明確な譜法であり、リズムの解釈については議論が分かれるところである。全ての音符(ネウマ符)がその形状にかかわらず同じ長さだったとする「等量派(ソレム派)」と、音符の形によって長さが違っていったとする「計量派(定量派)」が対立している。「等量派」のソレム唱法に対しては、近代的な美意識に沿うような主観的な解釈をしすぎており、本当にそのようなリズム体系であったのか、記号解釈学(セミオロジー)の立場から歴史的・資料的根拠に疑問が残るといった批判がある。よって学問的には「計量派」的に歌われたとする説が有力。ただし「計量派」の読み方が確立されていない為、実際の演奏はソレム唱法が一般的である。

参考文献：

- 『グレゴリオ聖歌 (文庫クセジュ 811)』(ジャン・ド・ヴァロワ著, 水嶋良雄訳, 白水社, 1999)
- 『グレゴリオ聖歌』(水嶋良雄著, 音楽之友社, 1966)
- 『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック - ミサとは・歴史・発音・名曲選 - 』(三ヶ尻正著, ショパン, 2001)
- 『グレゴリオ聖歌の世界』(リチャード・L. クロッカー著, 吉川文訳, 音楽之友社, 2006)
- 『音楽史の中のミサ曲』(相良憲昭著, 音楽之友社, 1993)
- 『西洋音楽の歴史』(高橋浩子ほか編著, 東京書籍, 1996)
- 『第2 パチカン公会議・公文書全集』(南山大学監修, 中央出版社, 1986)
- 『世界大百科事典』2004年版 (平凡社, c1988)
- 『ブリタニカ国際大百科事典』(フランク・B・ギブニー編, ティビーエス・ブリタニカ, 1972-1975)
- 『音楽大事典』2, 4 (岸辺成雄ほか編, 平凡社, 1982)
- 『新カトリック大事典』2, 3 (上智学院新カトリック大事典編纂委員会編, 研究社, 1998-2002)
- 『グレゴリオ聖歌成立にかんする諸問題』(皆川達夫著, 『音楽芸術』24 巻4号 p6-11, 音楽之友社, 1966)
- 『日本におけるグレゴリオ聖歌の今日的意味』(宍功著, 『カトリック研究』29 巻1号 [57号] p49-70, 上智大学神学会, 1990.6)
- 『グレゴリオ聖歌の研究と国語聖歌の実践』(小田賢二著, 『カトリック研究』29 巻2号 [58号] p281-313, 上智大学神学会, 1990.12)
- 『グレゴリオ聖歌の成立 中世・ルネッサンスの音楽史 4』(皆川達夫著, 『音楽芸術』29 巻4号 p68-71, 音楽之友社, 1971.4)
- 『グレゴリオ聖歌の実態 中世・ルネッサンスの音楽史 5』(皆川達夫著, 『音楽芸術』29 巻5号 p64-68, 音楽之友社, 1971.5)
- 『グレゴリオ聖歌の周辺 中世・ルネッサンスの音楽史 6』(皆川達夫著, 『音楽芸術』29 巻6号 p74-78, 音楽之友社, 1971.6)

(Atsuko FUJITSUKA : 図書館事務課)

「資料寄贈者等 (前号以降から 2006.9 まで)」

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人] 青山玄氏、丸山徹氏

[団体] 川名山聖霊修道院、東海メールクワイアー、日本基督教団名古屋桜山教会

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第 21 号 2006. 11. 1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員：岩間潤子、児玉あずさ、牧野多完子 (~ 9. 30)

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/katholikos/katholikos-index.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL: 052-832-3163 FAX: 052-832-3462 担当者：児玉